虚の筏（ソラのイカダ）35

洪水企画 2025.1.25
http://www.kozui.net

深夜の

平井逢也

新聞紙みたいな顔色をして男が深呼吸すると
息を吐きすぎて
裏面に内緒で刷られていた
うつくしい愛までのぞいてしまう

毛ほどほっそりと夜が来て
ブラウン管に残っている湿り
付箋づけられた語の
裏の意味
あるいは
語で強調された付箋の
半透明な赤色に溶けている意味

霧吹きで湿らせた新聞紙で型を取ろう
ちくたくと肉を煮ている
裏面に愛が内緒で刷られているよ
クッションとクッションの間の狭いすきまから
倦怠があきあきしたと歌いだす

煮あがっても
ちくたくしている肉
毛ほどほっそりした宴に
やっと乾いたブラウン管が花を添え

走り出す蒸気機関車の力強さで
補色の関係の一方だけを示すむなしさで
音に似たものが響いている

秋を焼く　短詩三題

生野　毅

歯肉から運河が零れ落ちる
母屋の壁紙を破って掛けられた
模造の花々から垂れ下がる髪をまさぐっていても

枯れ枝になった指を
枯れ枝になった指で擦り合わせて
やがて　枯れ枝になった臓腑をくべるために

もう　とっくに
両目がかさぶたのまぶたで覆われているので
ざらざらした固まりの一つ一つを積み上げていっても
何しろ手探りだから　転がる鈍い響きと
舌打ちやため息がたえることなく
固まりの一つ一つの両目も
かさぶたのまぶたで覆われているというのに

雀色時

海埜今日子

かわたれ、たそがれ、こんにちは。近くなのに、ゆけない。すけそうな門、わずかに開いた扉をくぐるのは、誰なのかしら。羽ばたきが、追うように空をきった。雀色時ともいうそうだから、あれはきっと、〈雀の羽がどんな色をしているか……言葉に表わそうとすると、だんだんにぼんやりして来る。これがちょうど又夕方の心持でもあった〉＊。誰そ彼は、彼は誰。あやまつ、ちがう鳥かも、視線が、わたしになり、追って、うけとる。ふたしかな色のまま、きえたのかしら。ひとかけ、のみこむ。風をこぼし、どこかをついばむ。扉など、なかったのだろうか。だいいち、ほんとは土色が浮かぶのだと、あ、飛び去った。この先を、思い出したい、でも、しらない。きしんだ音が風にのって、いっしょにね。視線たち、ぬれたように、ほのあかるいのは、誰も彼も、悲しんでいたからかもしれない。夜のとばりが、せまってきていた。土の気配、たぐるように、扉をたたくたび、言い残した言葉がこぼれてゆく。あたらしくって、おぼえたくなる。遠いのに、手をのばせば。やっぱり、きえていたのかも。彼は誰、とっても色がにぎやかで、あらわせない羽なのです。みうしない、あせて、でも、ぼんやり染まる声の、呼びあって、だったらいい。足跡が気配なら、ちがう鳥かも。雀の群れを最近みません。門はどこ、視線がぬける、扉なんです。心持ちにあかりをともせば、さつき、うかんだ文字をほおばる、あれは、まざっても、やっぱり雀だ。ゆけるかしら、ながれるほどに近さです。かわたれ、たそがれ、また明日。

＊柳田國男『妖怪談義』「かわたれ時」より

藍の城

二条千河

道はどこへ通じているのか
目抜き通りは緩やかにごくゆるやかに湾曲して
そうと気づかせぬままに方角をたがえていく
直進する路地は鉤状に折れて行く先を隠し
後戻りをすればなぜか袋小路に迷いこむ
城を守るのは城下町の使命であるから
川が濠であり堀が土塁であり木々が柵であるように
あらゆる道路は敵を阻むための虎口である
（敵とは　だれだ）
しかし肝腎の　その守るべき城が
どこにも見当たらないのはどうしたわけか
幾重もの防衛線に取り巻かれた中心地には
一面の草原に蓼藍の葉が茂っているばかりで
それもまた敵をあざむくための罠なのだろうか
（敵とは）

町づくりの始まる時点ですでに戦は終わっていた
敗残者たちが担い手であった以上それは疑いない
にもかかわらず　この町は
最初の一鋤から絶えず攻めよせる軍影を幻視している
未来の侵略者を　いつか土足で踏み荒らしに来るものを
（つまり　私たちを）
やがて川は埋もれ堤はすり減っても
最後の最後まで城を守るのが城下町の使命であり
何ものにも奪わせないための唯一絶対の道は
はなから存在させないことだ　とでも言うように
草原を吹きわたる風に藍の葉はざわめいて
苦味をおびた勝色[*]へと夕空を染めあげていく

道はどこかへ通じているはず
斜交いに食いちがっていく四辻も
進むほどに延びていく長い長い上り坂も
頭上高く交差する梢をリすの子がかろやかに行き来する
その下で立ち往生する車をたびたび見かけても
今のところ拡幅工事は無期限に延期されている
一陣の風が木下闇を駆けぬけて
彼方でまた
鬨の声があがる

＊勝色　黒に見えるほど暗い藍色。藍染めの際に布を掲つ（甲〈）ことから、勝の字を当てて武家の縁起色とされた。

山よりの歩道で

久野雅幸

落ち葉に混じってどんぐりが落ちている
山を削って通された国道の
わきにある
山よりの歩道

ときに
どんぐりに親しい人とすれ違う

眼鏡をかけた顔の　下半分に髭を生やし
ベージュ色の上下に　カーキー色のリュックを背負った
その人は
どんぐりに親しい人だった

身をかがめて
足もとから三、四個のどんぐりを拾った
これ以上離れたら風景になってしまう
という距離がある

山に生えた一本の木が山になってしまう距離
見送る人を黙って見送るしかなくなってしまう距離

ほうっておけば風景となるにすぎないものと
風景に対するのとは異なる
かかわりをもつにはあえてそうする必要がある
（自然なきっかけを望んだこともあったけれど）

あの人にも思いきって
おはようございますと声をかければよかったな
そのとたんその人がパッとリスに変わって
崖をのぼり去ってしまう
ということがたとえあったとしても

通学班の子どもたちがやってくる

子どもたちには
どんぐりに親しい人が多い
大人たちに比べて

二人の子どもがどんぐりを拾いあげ
ぶつけ合っている
その前で
先頭に立つ　班長らしい女の子が
固い表情でうつむいている

列を正さなければならないという責任感と
声をかけても無駄であるというあきらめとが
女の子にうつむくことを強いているようだ

――おはよう
と声をかけると

――おはようございます
と声が返ってきた

顔を上げて発せられた
大きな明るい声

クズに巻き付かれ
おおわれている電柱がある

ノブドウに巻き付かれ
おおわれている電柱がある
ヘクソカズラに巻き付かれ
おおわれている電柱がある
とってかわる準備はいつもできているんだぞ
元気でたくましいものたちと
すれ違う

時間の果てのアーケードで

小島きみ子

一八年まえの夏の初めに、Mと出会った。
添付ファイルで送ってもらった北八ヶ岳原生林の湖沼の色についての調査記録を読んでいた。新しい職場にはMが勤務していた。Mの提案で来週からの五日間の夏季休暇を使ってフィールドワークのための下見に、Mの車で行こうという約束をした。池は標高二一五mの場所にあり、八ヶ岳湖沼の中で一番大きい。二〇〇m以上の高地にある湖としては最大で面積は11.4ha。湖岸線は、一三五〇mある。ジャンパーとトレッキングシューズを新調した。表象するものは、表象されたものと一致しない。水そのものの色と、見かけの色の類似と相似の差異は、より多く有機物特に溶存有機物の蓄積を持つ水域についての特徴を知ることだった。

車の運転中にラヴェルのピアノ曲を聴いていた。
ラヴェル独自の作風へと昇華するきっかけとなった作品といわれている『水の戯れ』のピアノ曲は、噴水の水の上がるさま、落下するときの光のきらめきが、単純な繰返しゆえに水の軽やかさが見事に表現されているけれども、『亡き王女のためのパヴァーヌ』も好きだった。〈パヴァーヌ〉とは当時ヨーロッパの宮廷で普及していた踊りのことで、この題名は〈亡くなった王女の葬送の哀歌〉ではなく〈昔、スペインの宮廷で小さな王女が踊ったようなパヴァーヌ〉だという。王女とはラヴェルがルーヴル美術館を訪れたときに見た一七世紀スペインの宮廷画家ベラスケスのマルガリータ王女にインスピレーションを得たとされる。

カレンダーの日曜日に赤い印をつけた夏は、日曜画家たちに混ざって、
Mとふたり、スイレンの絵を描いていた。冬の公園の階段を降りていくと、仲の良い老夫婦が水を止められた噴水を見ながら、お弁当を食べていた。北風が来なくて温かい窪みの場所。ベンチには木の葉が吹き寄せられていて翅脈が捩れた蜻蛉が止まっていた。こうふくな陽だまりに、目を細めたとき、幻の噴水の水が上がる。

次の夏が来ても水の節約のために、噴水の水は上がらなかった。
人間が生まれたり死んだり。小鳥がさっと飛んできて囀って飛び立つ。噴水の水は永遠に止まった。なんでもないように。噴水のきらめきも、スイレンの花のそよぎも、スイレンの花を愛した人間のことなどどうでも良かったように。そうやって時間は喪われてゆく。人間と呼ぶものの愛が喪われなかったのは、夏が、人間を記憶していたから……

時間の果てのアーケードで、商店街の福引抽選会場を出ると。
サンタの帽子を被った青年がわたしの知っている音楽を葦の茎で作った楽器で演奏していた。讃美歌九八番「天には栄え」（あめにはさかえ Hark! The Herald Angels Sing）は、アティチュードになっていた。（：地には善意の人に平和あれ。）

＊註　讃美歌九八番は、歌詞チャールス・ウエスレー、原曲はメンデルスゾーン。

バス（4）

池田　康

バスを降りる
うっぷんが鬱屈し
乗ってられないと降りてしまう
先行きの見通しもなくとぼとぼ
風景もゆっくり動き
それもまた楽しいと思えればいいのだが
正直なんの感興もない
なんの感興も！
自分自身にあきあきし
地球にもうんざりしている
そもそも歩き続ければ一巡りして元の場所に戻るなんて
なんの冗談だろう
まったく歩く意味がない！
としても　少しだけ歩くのは意味があるかもしれない
だからとぼとぼと歩く
野良犬がこちらを見ている
野良犬についていく
犬は人間の道ではないところを歩いていく
足の裏がぎくしゃくする
頭の中もぎくしゃくする
ゴミ捨て場につくと
老爺の死体が転がっていてたくさんの犬が食い漁っている
ここで立ち止まればぼくも食われると思い
ひたすら歩き続ける
走ると犬が追っかけてくるぞ　子供の頃の教えを思い出し
あえてゆっくり歩く
ゴミ捨て場が見えなくなったら
立ち止まって　ひとつため息をつく
その音がひどく大きく聞こえた
この命を野良犬にくれてやるのもいい
なんて強がりは冗談でも言うな
寝言をつぶやいているうちにうとうとして
歩きながら眠ってしまい
自分が野良犬になって歩く夢を見る
野良犬はおいしそうな死体を拽しているようだ
水たまりの水をなめたい欲望にかられる
行けども行けども荒野で人間の道に出ない
はるか遠くに咆哮が聞こえおもわず自分も叫ぶ
岩陰にトカゲを見つけ駆け出そうとして転び人間に戻る
人間に戻る　それは残念なことだ
人間など野良犬に食われてしまうがいい
一瞬だけ本当にそう思った
藪をかき分けると人間の道に出た
とぼとぼと歩いていると大きな通りに出て
道端の石に腰かけているとバスが来たので乗る